

## 「群衆とレビ」

マルコの福音書 2:13~14

### はじめに

今日の箇所は、イエシュアの弟子として、新たにレビという人が加えられる出来事が記されています。ここには神のご計画がどのように表されているのでしょうか。早速見てまいりましょう。

### 1. 湖のほとり

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:13 イエスはまた湖のほとりへ出て行かれた。すると群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。

イエシュアは「また湖のほとりへ出て行かれた。」とあります。この湖とはガリラヤ湖のことですが、「また湖のほとりへ」とあるように、イエシュアがこの場所に行かれるのはこれで二度目になります。ヘブル語ではここにシューヴ(שוב)「帰る、去る、戻る」という意味の動詞が使われており、「また湖のほとりに戻って行かれた」とも訳すことができます。ですからこの「また」には、一度目すなわち最初に戻るという意味合いがあると思われます。マルコ 1:16~19 にイエシュアがその最初にガリラヤ湖に行かれた時のことが記されています。

【新改訳 2017】

マルコの福音書

1:16 イエスはガリラヤ湖のほとりを通り、シモンとシモンの兄弟アンデレが、湖で網を打っているのを  
ご覧になった。彼らは漁師であった。

1:17 イエスは彼らに言われた。「わたしについて来なさい。人間をとる漁師にしてあげよう。」

1:18 すると、彼らはすぐに網を捨てて、イエスに従った。

1:19 また少し先に行き、ゼベダイの子ヤコブと、その兄弟ヨハネをご覧になった。彼らは舟の中で網  
を繕っていた。

1:20 イエスはすぐに彼らをお呼びになった。すると彼らは、父ゼベダイを雇い人たちとともに舟に残  
して、イエスの後について行った。

このように、最初にガリラヤ湖に行かれた時、イエシュアは漁師であったシモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人を呼ばれ、彼らは「イエスに従った」とあります。その出来事があった場所へイエシュアは再びシューヴ、戻られたのです。そしてこの二度目には「群衆がみな、みもとにやって来た」とあり、そして次の節でレビという一人の人が「イエスに従った」と記されています。ですからイエシュア

が「ガリラヤ湖のほとりを通り」そして「また湖のほとりへ出て行かれた。」という、この二つの出来事は、イエシュアがご自分に従う人々を呼び出され、集めるという、同様の出来事を繰り返すように記されていることがわかります。これは聖書の中の随所に見られるパラレリズム、対句法、並行法とも呼ばれる強調表現で、同じ内容のものを別の言葉を用いて繰り返して強調したり、さらに説明を加えてその意味を深めたりする意図があると考えられます。

イエシュアが	最初	シモン、アンデレ、ヤコブ、ヨハネの四人が	イエシュアに 従った
湖のほとりに行く	二度目	群衆がみな、そしてレビが	

そしてこれが二度繰り返されているのには、これが後に起こること、必ず実現する神のご計画であることを指し示していると考えられます。創世記 41:32 にこうあります。

【新改訳 2017】

創世記

41:32 夢が二度ファラオに繰り返されたのは、このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさるからです。

これはヤコブすなわちイスラエルの子ヨセフが、エジプトのファラオが見た夢を神によって解き明かしたという出来事を記した一節ですが、一つの意味を持った夢が異なる絵を用いて「二度…繰り返され」、その理由が「このことが神によって定められ、神が速やかにこれをなさるから」とあります。このように二度繰り返すことには、神のご計画が指し示されていると考えられます。ですからイエシュアが湖のほとりへ出て行かれたことによるこの一連の出来事もまた、神によって定められたご計画を指し示していると考えられます。

ではそのご計画とはどのようなものであるかを、ヘブル語の視点で考えてみたいと思います。「また湖のほとりへ出て行かれた。」これをヘブル語で記すと



となり、この文章には先ほど取り上げたシューヴ(שוב)「帰る、去る、戻る」という意味の動詞の他に、「出て行く、来る」という意味の動詞ヤーツァー(יצא)が使われていることがわかります。この二つの動詞は一見同じような意味を持っているように見えますが、その本来の意味は全く異なるようです。

【新改訳 2017】

創世記

3:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついにはその大地に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたは土のちりだから、土のちりに帰るのだ。」

これはエデンの園で罪を犯したアダムに対して神が言われた御言葉です。「大地に帰る」と訳されている箇所には聖書で最初のシューヴがあります。このようにシューヴとは本来、肉体的な死を指し示す言葉であると考えられます。

【新改訳 2017】

創世記

1:11 神は仰せられた。「地は植物を、種のできる草や、種の入った実を結ぶ果樹を、種類ごとに地上に芽生えさせよ。」すると、そのようになった。

一方これは「行かれた」と訳されたヤーツァーの最初の言及です。神の天地創造の御業の第三日、神が地上に植物を芽生えさせられた場面です。このようにヤーツァーは本来、生まれる、増えることを指し示していると考えられます。ですからシューヴは死、そしてヤーツァーは誕生という、全く対照的な意味を持った言葉であると考えられます。これは神のご計画が、今のこの時代を「ちりに帰す」終わらせることにあり、そして再び「芽生えさせる」生み出す、建て直すことにあることが指し示されていると考えられます。そして神はそのためにご自分に、またイエシュアに聞き従う民を呼び集められることが、「湖のほとり」という言葉に表されていると考えられます。ヘブル語では湖も海も同じでヤーム(יָם)と言います。この最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

1:9 神は仰せられた。「天の下の水は一つの所に集まれ。乾いた所が現れよ。」すると、そのようになった。

1:10 神は乾いた所を地と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神はそれを良しと見られた。

これは神の天地創造の御業の第三日、地と海が分けられたという記述です。神は「天の下の水」に向かって「一つの所に集まれ」と仰せになり、それによってできたものがこのヤーム「海」です。ですからヤームには本来、「神によって一つの所に呼び集められたもの」という意味があると考えられます。

このように、「イエスはまた湖のほとりへ出て行かれた。」という記述をヘブル語の視点で捉えるならば、今のこの時代の終わり、そしてイエシュアとイエシュアに聞き従う、呼び集められた者たちのみによって建てられる「神の国」のご計画が、そこに表されていると考えられます。

## 2. 群衆を教える

そしてイエシュアはその湖のほとりで、集まって来た「群衆」を「教えられた」とあります。ここにはヘブル語で「民、同族」を意味する名詞アム(אָמ)と、「学ぶ、教える」という意味の動詞ラーマド(לָמַד)が使われています。それぞれの最初の言及を見てみましょう。

【新改訳 2017】

創世記

11:6 【主】は言われた。「見よ。彼らは一つの民で、みな同じ話しことばを持っている。このようなことをし始めたのなら、今や、彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない。

11:7 さあ、降りて行って、そこで彼らのことばを混乱させ、互いの話しことばが通じないようにしよう。」

11:8 【主】が彼らをそこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。

11:9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。そこで【主】が全地の話しことばを混乱させ、そこから【主】が人々を地の全面に散らされたからである。

これは天に届く塔、バベルの塔を建てようとした民についての記述ですが、ここに聖書で最初のアムがあります。神はこれを「一つの民」と呼ばれ、「彼らがしようと企てることで、不可能なことは何もない」というほどの強い民であると言われました。しかしバベルの民は自分たちの名を上げ、神のようになろうとしたために、神はこれを世界中に散らされました。このようにアムとは本来、「一つの民」であったが「地の全面に散らされた」民を指し示していると考えられます。聖書を見る限り、このような民、これを指し示す民はイスラエルの民、ユダヤ人しか考えられません。旧約聖書に記された彼らの歴史において、確かにこの民は栄華を極めた強大な国となり、そしてその直後に南北に分裂し、やがて世界中に離散させられて行きました。しかし神は彼らを見捨てられたものではありません。先ほどの「湖のほとり」ヤームの最初の言及が指し示したように、再び一つの所に集め、その地を所有させようとしておられるのです。その事実が次の「教えられた」と訳された、ラーマドの最初の言及に表されていると考えられます。

【新改訳 2017】

申命記

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

これは神がイスラエルの民に語られた御言葉です。このようにラーマドとは本来、神がイスラエルの民を「教える」こと、そしてこの民がそれに聞き従うこと、それによって神が彼らに与えようとしておられる、すなわち計画しておられる「地に入り、それを所有するためである。」ことが指し示されていると考えられます。そして神はこの同じ申命記 4 章の中でイスラエルの民が「教える」掟と定めに関心することについてこのようにも語っておられます。

4:5 見なさい。私は、私の神、【主】が私に命じられたとおりに掟と定めをあなたがたに教えた。あなたがたが入って行き、所有しようとしているその地の真ん中で、そのとおりに行うためである。

4:6 これを守り行いなさい。そうすれば、それは諸国の民にあなたがたの知恵と悟りを示すことになり、彼らはこれらすべての掟を聞いて、「この偉大な国民は確かに知恵と悟りのある民だ」と言うであろう。

4:7 まことに、私たちの神、【主】は私たちが呼び求めるとき、いつも近くにおられる。このような神を持つ偉大な国民がどこにあるだろうか。

4:8 また、今日私があなたがたの前に与えようとしている、このみおしえのすべてのように正しい掟と定めを持つ偉大な国民が、いったいどこにあるだろうか。

神はイスラエルの民を再び集められ、そしてこれをラーマド「教え」、かつてのバベルの民以上の「偉大な国民」にしようというご計画をお持ちであり、それが「群衆がみな、みもとにやって来たので、彼らに教えられた。」という描写の中に「型」として表されていると考えられます。

### 3. レビ

【新改訳 2017】

マルコの福音書

2:14 イエスは道を通りながら、アルパヨの子レビが収税所に座っているのを見て、「わたしについて来なさい」と言われた。すると、彼は立ち上がってイエスに従った。

そして次にイエシュアは取税人であったレビを呼ばれるのですが、その時イエシュアは「道を通りながら、」とあります。ここには「渡る、進む」という意味の動詞アーヴァル(אָוַר)が使われています。

【新改訳 2017】

創世記

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

これはノアの箱舟の出来事の一場面ですが、全世界を水没させた大洪水の終わりを記した箇所です。ここで「神は地の上に風を吹き渡らせた」と訳されている箇所に聖書で最初のアーヴァルがあります。これによって地上から水が引き始め、大洪水が終わるのですが、聖書はその理由として「神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた」からであるように記しています。また「風」はヘブル語でルーアハ(רוּחַ)と言い、本来は「神の霊、聖霊」を意味する言葉です。ですからアーヴァルには本来、神が目を留められ、御自身の霊を注がれた、選ばれた者たち、神の民を指し示す言葉であると考えられます。ちなみにこのアーヴァルはイスラエルの民の別称である「ヘブル人」の意味であるイヴリー(עִבְרִי)の語源ともなっている言葉で、このことからイスラエルの民が神の民であることが表されていると考えられます。ですからイエシュアがアーヴァル「道を通りながら」取税人レビに目を留められたという記述の中に、神がご自分の民を覚えておられ、ノアの箱舟にいたものたちのように、これを必ず救い出し、地を所有させてくださるという神のご計画が表されている

と考えられます。またこのレビ(לֵוִי)という名前は「連なる、伴う」という意味の動詞ラーヴァー(לוּוָה)が語源となった言葉です。どちらの言葉も以下の記述が最初の言及です。

【新改訳 2017】

創世記

29:34 彼女はまた身ごもって男の子を産み、「今度こそ、夫は私に結びつくでしょう。私が彼に三人の子を産んだのだから」と言った。それゆえ、その子の名はレビと呼ばれた。

これはヤコブすなわちイスラエルの妻であったレアが三男「レビ」を産んだことについての記述です。レアが「夫は私に結びつくでしょう」と言った箇所に聖書で最初のラーヴァーがあります。その理由はレアが夫のために「三人の子を産んだ」からだと記されています。これはもちろん子どもの数や順番についてのものですが、それ以外にこのレアよりも先に、同じく「三人の子を産んだ」存在との結びつきが考えられます。それはノアです。

【新改訳 2017】

創世記

6:8 しかし、ノアは【主】の心にかなっていた。

6:9 これはノアの歴史である。ノアは正しい人で、彼の世代の中にあつて全き人であった。ノアは神とともに歩んだ。

6:10 ノアは三人の息子、セム、ハム、ヤフェテを生んだ。

最初の人であるアダムもカインとアベル、そしてセツという三人の息子を生んでいますが、カインがアベルを殺してしまいますので、ノアが聖書で最初に「三人の息子…を生んだ」人物として記されています。このように「三人の子を産む」とは、単に数的な意味だけでなく、この「ノア」を指し示し、「【主】の心にかなう」、「正しい人」、「全き人」そして「神とともに歩む」人のことを指し示すと考えられます。このように「レビ」という名前には、「三人の子を産んだ」ノアについて記された記述が指し示されており、イエシュアはこのような者に目を留められる、イスラエルの民がこのような民へと変えられるということが表されていると考えられます。

またこの「レビ」は「アルパヨの子」であったと記されています。「アルパヨ(אֶלְפַיִם)」とはヘブル語ではこのように表記されますが、ここに「通り過ぎる、変える」という意味の動詞ハーラフ(הֲלַף)を見つけることができます。このハーラフの最初の言及は創世記 31:7 です。

【新改訳 2017】

創世記

31:6 あなたたちがよく知っているように、私はあなたたちの父に、力を尽くして仕えてきた。

31:7 それなのに、あなたたちの父は私を欺き、私の報酬を何度も変えた。しかし神は、彼が私に害を加えることを許されなかった。

これはヤコブすなわちイスラエルが、彼の妻レアとラケルの父ラバンに仕えていた時の記述です。ヤコブはラバンに忠実に仕えましたが、ラバンは彼を欺き「報酬を何度も変えた」とあります。ここに聖書で最初のハーラフがあります。このようにハーラフには本来、ラバンに欺かれ、嫌がらせを受けるヤコブの姿が指し示されており、そしてこれは派生的に、異邦人に虐げられ迫害を受けるイスラエルの民、ユダヤ人たちの姿が表されていると考えられます。世界史においてユダヤ人たちは、その離散した先の世界の各地で迫害を受け、時に絶滅の危機に瀕したこともあり、今日もなおその影響は続いています。このように、「アルパヨ」という名前には、異邦の地で迫害を受けるイスラエルの民の姿が表されており、その民に目を留め、「わたしについて来なさい」と言われ、これと呼び集める御方がイエシュアであることが表されていると考えられます。

そしてこのレビは「収税所に座って」いた、取税人であったことが記されています。この「税」税金、貢ぎ物のことをヘブル語でメヘス(מֶחֶס)と言いますが、実はこの言葉は旧約聖書では民数記 31 章でしか使われていない非常に珍しい名詞です。この箇所はモーセがイスラエルの指導者であった時の最後の戦いについて記したもので、モーセがイスラエルの各部族から 1000 人ずつを徴兵し、計 12000 人の兵でミディアン人と戦わせるというものです。イスラエルは見事この戦いに勝利し、衣服や貴金属、家畜や奴隷など非常に多くの戦利品を獲ます。モーセはその中から汚れた物や偶像礼拝に関するものを取り除き、祭司エルアザルはこの戦利品の総数を調べ、その中から神が定められた数の分だけを徴収し、これを神へのメヘス、つまり「貢ぎ、奉納物」としました。このように「税」と訳されたヘブル語のメヘスには本来、戦いの勝利、罪や汚れの排斥、そして神へのささげもの、すなわち神の所有というような意味が指し示されていると考えられ、イスラエルがまさにそのような民となることが、取税人であったこの「レビ」という存在の中に表されていると考えられます。

#### 4. 立ち上がって従う

イエシュアがレビを見られた時、彼は収税所に「座って」いたとあります。そしてイエシュアに呼ばれ「立ち上がってイエスに従った。」とあります。ヘブル語で「座る」はヤーシャヴ(יָשָׁב)、そして「立ち上がる」はクーム(קוּם)です。この二つの言葉の持つ本来の意味については以前お伝えしましたが、「座る」ヤーシャヴは創世記 4:16 にその最初の言及があり、そこから「神の御前から離れ去ってさすらう(状態にとどまる)」という意味があると考えられ、そして「立ち上がる」クームは創世記 4:8 の出来事から、「立ち向かう、殺す」という意味があると考えられると述べました。この二つの言葉の持つ本来の意味は、イスラエルの歴史を見事に表しています。神の民として選ばれたイスラエルですが、その歴史、その歩みは神に対する不信、反逆、そして偶像礼拝による墮落の連続で、やがて国は崩壊し、世界中に散らされる離散の民、まさに「さすらう」民となりました。そして彼らは神の御子であるイエシュアに逆らい、この御方を十字架にかけて「殺す」のです。このような罪を犯す民が、神の選ばれた聖なる民であるとは一体どういうことか、と理解に苦しみますが、これらはすべて神のご計画なのです。

つまり人の力や知恵によってではなく、ただ神の御手によって成し遂げられるために、また神はあわれみ深く、愛と恵みに満ちておられることを示すために、あえて神はイスラエルの民を弱く、愚かで罪深い民とされたのです。しかしイスラエルの民がこれで終わらないことが、「座り」「立ち上がった」レビが、「イエスに従った」という記述に表されていると考えられます。ここには「歩く」という意味の動詞ハーフ(הלך)が使われており、その最初の言及である創世記 2:14 から、全地を潤し、豊穡と繁栄を与える神からの祝福を、川のように流し出していく存在が指し示されており、イスラエルがそのような、世界を祝福する民となることが表されていると考えられるからです。それは以下のように約束されているとおりです。

【新改訳 2017】

創世記

28:13 そして、見よ、【主】がその上に立って、こう言われた。「わたしは、あなたの父アブラハムの神、イサクの神、【主】である。わたしは、あなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫に与える。

28:14 あなたの子孫は地のちりのように多くなり、あなたは、西へ、東へ、北へ、南へと広がり、地のすべての部族はあなたによって、またあなたの子孫によって祝福される。

28:15 見よ。わたしはあなたとともにいて、あなたがどこへ行っても、あなたを守り、あなたをこの地に連れ帰る。わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない。」

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルとその子孫とに与えられた神の約束、ご計画です。国土を失い、放浪と迫害の歴史の中で、何度も絶滅の危機に瀕してきた彼らイスラエルの民、ユダヤ人たちが今日もお現実に存在しているのは、イスラエルの神が現実に生きておられ、そしてこの御方が「わたしは、あなたに約束したことを成し遂げるまで、決してあなたを捨てない」という約束を果たそうとしておられることの、動かぬ証拠です。私たちの神は今日も生きて働いておられます。アーメン

座っていたレビが立ち上がり、そしてイエシュアに従ったという、日本語では単純な、ただの状況説明のような記述も、ヘブル語の持つ本来の意味でこれを捉えるならば、そこには聖書全体に表された神のご計画を垣間見ることができます。今日もその事実を分かち合えたことを神に感謝します。